

市史編さんだより



(51)

最近の武士論と村山党

東村山市が中世の武蔵國を代表する武士団、いわゆる武蔵七党の一つ村山党と非常に関係が深いことはよく知られています。近年、その武士・および武士団について新しい評価が行われてきていますので、ここでは簡単な紹介をしてみたいと思います。

従来の武士に対する評価は、古代律令國家が崩れ治

安が乱れてくると、自分たちの領地などを他の領主や國司の侵害から守るために武装したのが武士の始まりだ、といわれてきました。自衛的な武士論といえます。

それに対して、最近では職能的武士論が主張されています。それは、武士は自分の領地を自衛するために発生したのではなく、本来的に職業的な武士であった、という考え方です。

このような考え方がでてく

る要因はいろいろありますが、まず第一は、武士の持つ武力の原型が実はエミシとの戦争の際の武力にあつたことが明らかになってきたことです。

中世の武士の技術を示すことばとして「馬の道」がありますが、この馬上から弓を射るといふ戦闘技術は、馬術に優れたエミシとの戦争を通じて発達してきたのです。

第二は、平安時代の貴族たちがもっていた「武士」のイメージが明らかになってきたことです。紫式部によつて『源氏物語』が書かれたころとは同じころに、藤原明衡という學者によつて一冊の漢文の書物が書かれました。『新猿蓑

記』といひます。これは「猿蓑」(現在の能・狂言の原型になつた滑稽な芸能)を見物にきたある家族に託して、当時の三十種ほどの職業とその技術を列挙した作品なのですが、そこに武士(武者)が登場するのです。そこには次のように書かれています。

中の君の夫は天下第一の武者なり。合戦・夜討ち・馳射・略・騎射・笠懸・流鏑馬・(略)・手挟ちの上手なり。あるいは甲冑をき、弓箭を帯し、干戈(はこ)を受け、大刀をつかい、はた(旗)をなびかして楯を築き、陣を張り兵を従ふるの計(は

かりごと、まことに天の与えたるの道なり。(後略)

この文章のなかに、自衛する武士のイメージは微塵もありません。合戦・騎射の専門家、それらを職業としてゐる者たちのイメージです。これが貴族たちの武士の評価でした。

このような新しい武士論を踏まえたとき、武蔵七党そして村山党はどのように評価しなおせばよいのでしょうか。市史の通史編に向けて、古代・中世部会が解決しなければならぬ重要な課題の一つだと考えます。

古代・中世担当 木村茂光